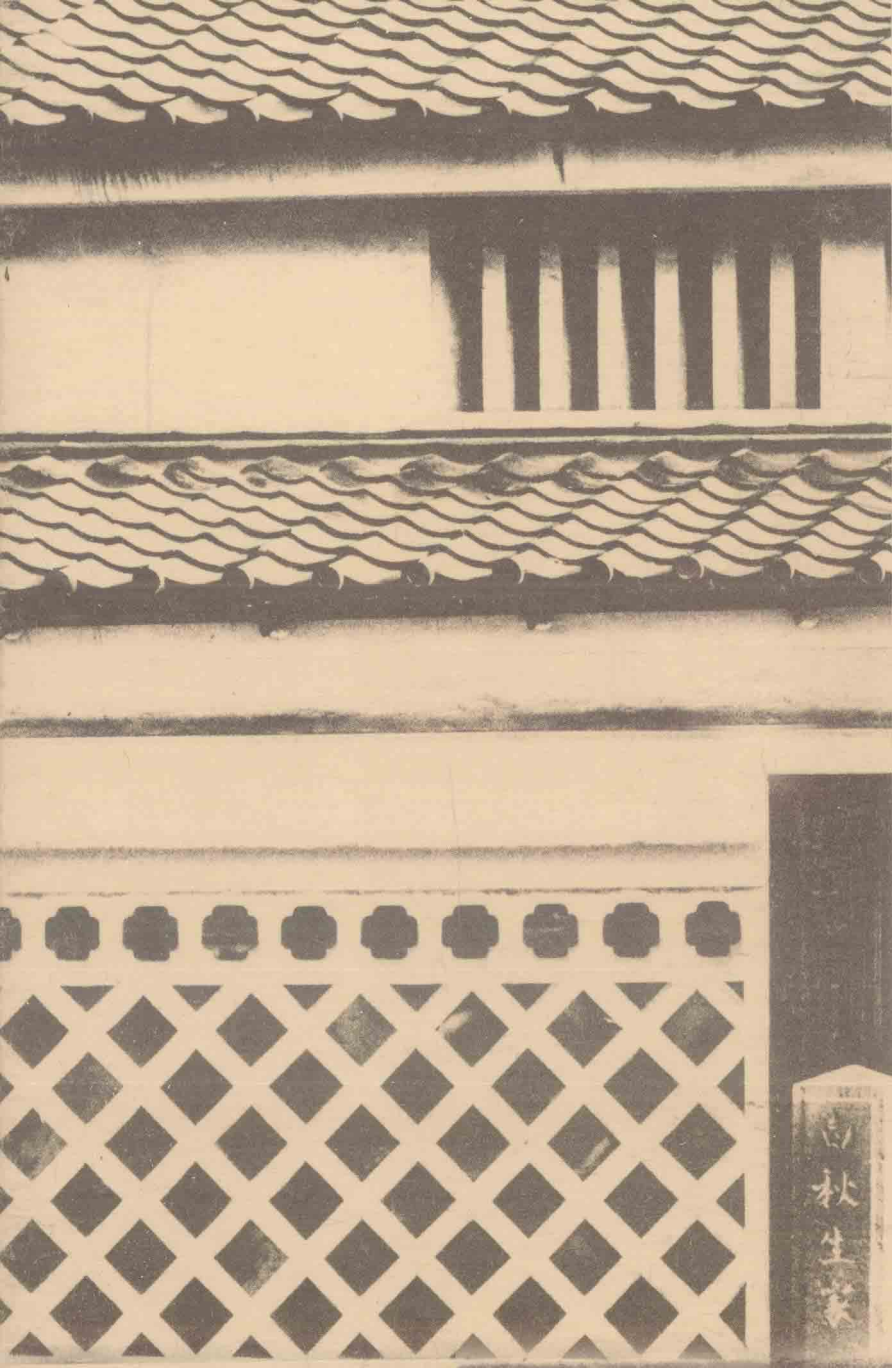




白秋めぐり

山本太郎

白秋めぐり

一九八二年二月二五日 第一刷印刷
一九八二年三月一〇日 第一刷発行

著 者 山本太郎

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一〇

電話 出版部 (〇三) 二三八一二八四二

販売部 (〇三) 二三八一二七八一

印刷所 大日本印刷株式会社

定 価 一、六〇〇円

©1982 Taro Yamamoto

0095-772365-3041

検印廃止。落丁・乱丁本はお取り替えます。

白秋めぐり

目次

あとがき式序章	7
大森緑ヶ丘時代のこと	13
直情径行と童心	18
「赤い鳥」童謡の推移	35
創作母胎としての環境	57
甘えと反抗と	70
自他一如の思想	84
音律について	100

うららか思想 119

『雲母集』『真珠抄』の位置 136

写生と実相観入 167

『雀の卵』と『雀の生活』 183

新しさの再発見 200

『フレップ・トリップ』と『海豹と雲』 213

後記 244

装幀・岡村元夫／表紙写真・平野邦男

白秋めぐり

あとがき式序章

伯父・白秋については、すでに幾つかの小文を書いているが、むろんそれらは彼ののこした歴大な創作領域の一端にふれたにすぎない。そこで改めて少し腰を据え、北原白秋の全体像に、人・作品をふくめ接近してみようと、筆をとるつもりになった。どこまで肉薄出来るか、いまのところ、さきゆきの見当もつかぬが、白秋をもういちど読み直してみようという気持が五〇代半ばにさしかかったいまの僕に動きはじめた意味だけは大切にしてゆきたい。

その動機のひとつは、数年前、雑誌「現代詩手帖」で『白秋特集』をやった際の座談会にある。座談会の主旨は前むきに白秋を評価し直そう、ということにあったわけで、その限りにおいて出席者の鮎川信夫、吉本隆明、大岡信氏等はまことに忌憚なく且つ真剣だったのだが、期せずして一致した点は、「白秋を語るべくあまりにも我々の眼にしうる作品資料がすくなくすぎる」ということだった。

詩歌に関していえば、およそ白秋ほど多角的で多作な人物もいない筈なのに、鮎川、吉本ほど

の評家でさえ、『邪宗門』『思ひ出』『桐の花』プラス・アルファ程度の白秋しか実際に読んだことがないのだと言う。(短歌への関心が深い大岡は晩年の歌集にも通じていたが)現代詩の有力なオビニオンリーダー達が、異口同音に、その時もらした言葉は、まづなにより多くのの人に、より多彩な作品が流布しなければ……という嘆息に近い現状分析であった。

白秋が「この頃は芸術でも教育でも何でも彼でもあまりに専科的分業的になり過ぎてゐる。で、いよいよ偏狭になり不統一になりやしないかと思ふね。我々にしたところで、詩人とか、歌人とか、やれ民謡作家だとか、童謡詩人だとか、一面からばかり見て、手つ取り早く何かに片づけられて了ふが、これは少々憐れなものだな。何故一個の芸術家と見ないのかな。兎に角迷惑至極なものだよ」云々と、詩歌の分権化を批判したのは大正末期のことだが、「白秋」見直しの傾向がともかく特集の形で組まれた背後には、大正から昭和にかけてのそうした分業主義によるゆきづまり現象が、しだいにアラワとなり、言語伝達に新しいメディアの応用が取り入れられ、いわゆる既成分野の境界が、少しずつ崩れかけているという事情もあったに違いない。

もともと、ジャンル間の手軽な野合が言葉の生命を浮薄にし、一種の崩壊現象をひきおこす流行相というのは、何時の時代でも実験の名に価しない一過性の鬼子として存在するが、日本語の質の実態を創作行為によってきりひらき、さまざまな文体を試みた白秋のフトコロの深さは、じゅうぶん鉛測に価するものと僕は考えるのだ。

耽美、官能の人、または国民詩人、グラン・メートルなどという空疎な美称(?)で白秋をくくってはならぬ。現代は日常茶飯事のうわつつらを器用に撫で、軽い文字をつらねて殊更マイナ

一を気取る軟風の若い詩人が簇生しているけれど、白秋は単なる量産によってメジャーなのではない。古風な言い方かもしれないが、言霊に命をかけ、心身をすりへらして、あらゆるジャンルをこえ、表現の可能性を実証したのだ。にも拘らず豊かな脈が、例えば薄っぺらな文庫本何冊かに抄出され、僅かな露出部を通じてのみ語られ、位置づけられているというのは、なんとも皮肉な話で、いかにも不本意なことではないか。僕が敢て白秋にいどむ理由はそこにあるといえる。

しかし白秋といえども、詩と短歌を並行して創っていた時代、童謡に主力の置かれた時期、長詩や幽玄体へ参入してゆく晩年など、幾段階かの変貌を重ねているわけだから、仮りに相当量の作品に接したとしても、その時々に応じて関心をよせえない人がいて当たり前だろう。

僕自身、かなりの期間、磨きあげられた珠玉の如き短歌や、晩年の薄明世界での諸作に理解や共感を抱いていたとはいえない。というより白秋の「完璧」に拒絶反応を示し、歌集でいえば『桐の花』の後半、『雲母集』、詩集でいうなら『真珠抄』の如き、赤裸々な吐心に心ひかれていた。つまり一部の信徒が白秋を神格化する傾向にマユをひそめ、白秋を伝説化してはならぬ、という心を持ちつづけてきた。そこには骨肉の情の反語的意識というものもまじっていたかもしれないが、ともあれ、やがて思い至ったことは、白秋自身が、詩や歌として独立作品とみたもの以外に、その底を流れる更に質朴で、彼自身の人柄に密接した筈の作品群があるに違いない、それを知りたいという想いだった。

そして、まず再発見したのが『雀の生活』『小笠原小品』『フレップ・トリップ』に代表される散詩文集の、あの余人に例を見ぬ律動感だった。

その面白さ、無類の自由律に關しては、序論的にはあるが旧著『言霊』ことだま（文化出版局）でふれているが、この機会に、その坑道はもつと掘り進めなければならぬと思つてゐる。

飯島耕一がかつて雑誌「短歌」に「白秋と茂吉を求めて」という評論を連載すると聞いた折にも、僕は彼にくどい位、これら散詩文の一読をすすめたものだ。

『白秋全集』全一八巻は昭和四年九月（第一回配本・第七巻歌謡集Ⅰ）から昭和九年一月（第一八回配本・第六巻歌集Ⅱ）にかけて赤い皮表紙の特装本と赤ビロードの普及版で出版されたきりである。白秋没年は昭和一七年だから当然、既刊の全集にはなお龐大な数の詩歌・詩文・童謡・随想の類は収録されていない。

白秋の著作はもちろん単行本として、ゆうに一〇〇冊をこえるし、今後とも研究家による編著は単発的に刊行されるだろうが、全集はもちろんのこと、前述の『雀の生活』（大正九年二月・新潮社。昭和八年七月・新潮文庫。昭和二年八月・抄本として杜文社）にしても『フレップ・トリップ』（昭和三年二月・アルス。昭和一五年新潮文庫）にしても入手容易とはいひ難い有様である。

飯島も『フレップ・トリップ』はさきにアルス版白秋全集の第十五巻で読んでいたが、この稿を書く二、三日前、『フレップ・トリップ』の初版を手にすることができた。こういう偶然にしばしばぼくは助けられることがある。しかしこれが一万九千四もするのだ。これでは『フレップ・トリップ』を読んだ一般読者はいまどき、というよりも戦後何十年もないのではないかと想像される。白秋の『雀の生活』や、『フレップ・トリップ』が、再刊されることなく眠ったまま放置されているとは驚くべきことだ。巷にはクダラナイ本が山と積まれ、現代の人々が真に味

読すべき『雀の生活』や『フレップ・トリップ』がかくされているのである」と痛憤している。

また彼は「あとがき」でこうも書きしるす。「白秋はもつと読まれるべきである。そして知られるべきである。われわれは白秋の名のみを知っていて、白秋その人に無知のままなのだ。(少略)これを書くことでぼくの詩的世界はたしかに一つ視界をひろくした。戦後の詩というパースペクティヴからぬけ出るためにも、朔太郎や、白秋や、茂吉へのアプローチは、なされなければならぬ内面的要求だった。やがてわが詩の実作にも何らかの影響を、本書は今後において与えるであろうと予感する。本書がまずまっさきに、若い詩人たちと歌人たちに読まれることをぼくはひそかに期待している」と。

刊行にあたって『北原白秋ノート』と改題された著書(小沢書店)は、いかにも飯島らしい率直さで貫かれており僕の期待をはつきりみたしてくれた。

僕はといえば、もともと「論考」の苦手な性格で、若い時期にごく僅かの先達、友人の作品から直覚的影響をうけたことはあるものの、出来ることなら、作品を通して語り歌おうという態度をとりつづけてきた。つまり詩を勉強しようなどと考えたことがないのだ。

この一巻で、どこまで白秋の世界に入りうるか、はなはだ心もとないが、直覚、直観ばかりアテにするわけにはゆくまいと思う。といって編年体の評伝を書く気はさらさらないし、註解はここにさけて通りたい。まあ飯島の「あとがき」に近い意味あいになるだろうが、僕自身の持論でもある詩歌細分化否定の立場を維持しつつ、文語・口語を丸ごとのみこんだ天与の詩人から、生きた言葉の脈筋、その括約筋を、われなりにつかみとればと願っている。

白秋の芸術に親しみを抱くには、ナマグサイ程の人間白秋像をも引きずり出さねばならぬだろう。例えば女性問題などに関し従来、かなり興味本位の伝聞めいたものもあるようなので、出来る限り識者の声に耳をかし、誤りは正してゆこうと思う。

飯島のアプローチに共鳴を持ちつつ、なお必然的に別種のものになるのは当然だが、時に引用の許諾を乞うこともあるだろうし、年譜及び、評伝的記述に及ぶ際は、藪田義雄『評伝 北原白秋』（玉川大学出版部）他、各種研究書を、出典を明記したうえで参照させていただくこともあろうかと考えるが、僕自身の白秋に関する記憶、アルス社長・故北原鉄雄伯父に聞いた話、唯一人健在な末弟、アトリエ出版会長・北原義雄叔父の経験談、それに亡父・山本鼎への書簡や亡き母・家子とのこしてくれた日記の類、そして何よりも鎌倉胡桃ヶ谷の北原家にある諸資料、菊子未亡人、従兄姉である隆太郎、篁子、その他ゆかりの方々にも、疑問生ずれば糺し、事実関係については正確を期したいと念じている。舟頭多くしてナントヤラのたとえもあるが、要はともすれば主観に走り勝ちな筆の手綱をどこまでとれるかが問題である。抑制は性にあわんし、暴走も禁物。序章からすでに、大変な仕事をひきうけてしまったと頭を抱えるテイタラクであるが、後悔はしていない。

本来、「あとがき」ともいうべき部分から筆を染めたのは、一種の煙幕といってもいいだろう。そしてこれは特筆大書すべき「まえがき」に属するが、わが拙文が、新しく「白秋全集」出版の引金のひとつになれば望外の幸いと思うのである。

大森緑ヶ丘時代のこと

僕が生れた年（大正一四年）の八月、白秋は鉄道省主催の樺太観光団に加わり、吉植庄亮とともに高麗丸に乗船、横浜を出港している。はじめ余り気乗りがしなかったこの旅は北海道遍歴を含め約一ヶ月に及び、紀行文『フレップ・トリップ』、詩集『海豹と雲』所収の詩篇、その他多くの短歌の母胎になるのだが、それらについては別に項目を設けて、ゆっくり考察してみたい。

翌一五年五月、彼は八年間の小田原生活をきりあげ、下谷区谷中天王寺町一八番地（現・谷中七丁目）に移っているが、一年と落着かず昭和二年三月には大森馬込の緑ヶ丘に引越している。

藪田義男の評伝（以下『藪田本』と略称）によれば、「夥しい訪問客」と「煤煙がたちこめて昼でも鬱陶しかつた」環境によるものだが、

「東京にはお星さんがないよ」

坊やが言え、「あゝ俺には書斎がない……」

つくづく小田原の壊れた山荘が恋しくなった。

という心境らしい。

坊や、つまり長男・隆太郎は大正一一年小田原で生れ、長女・篁子も一四年同地で産声をあげた。小田原からの引揚げは関東大震災で「木兎の家」が大破したためだが、この頃特に沢山の童謡、民話の創作に傾注し『まざあ・ぐうす』の翻訳（大正一〇年）まで試みたのは、はじめて二児にめぐまれた故でもあったろう。もともと童謡集『蜻蛉の眼玉』は大正八年刊だし、白秋における童謡、民謡の素地は詩集『思ひ出』の時代にすでに芽生えているといえるが、童謡に関しては改めて別項でふれるつもりだ。

ところで山本鼎が田端から大森へ移住したのも病弱な妻・家子の健康を案じ、新鮮な空気を求めてのことだった。即ち大正一二年、東京市外入新井、大森駅から池上通りを西へ徒歩十数分、熊野神社境内近くの閑静な一角に小さな平家を借り、北原義雄家と隣り合せて暮すようになった。白秋の両親も新婚間もない義雄の家に住んでいた。大震災はむろん大森をも襲い、鼎はやがて洋画の先輩白滝幾之助の画室を買い母屋を増築し、山王一丁目に移り住むが、そこがつまり僕の家である。（当時は東京市外荏原郡字源蔵ヶ原という呼称だった）

白秋が緑ヶ丘に居をかまえると、本郷動坂に出版社アルスを創立（大正六年）した次弟・鉄雄をのぞけば、北原一族の大半が、ごく僅かの期間ではあったが、ともかく同じ大森の地に集まる形になったわけだ。